

ナミビア派遣報告  
—基盤研究Sの可能性を探る—

京都大学  
アフリカ地域研究資料センター・特任研究員  
林 耕次

令和4年11月4日から11月13日にかけて、ナミビア共和国に渡航した。同年9月のボツワナ渡航に続いて報告者にとっては初めての訪問地であり、プロジェクト代表である高田教授に同行しながら、首都ウィントフックのナミビア大学において関係者と打ち合わせを行ったほか、ナミビア国立図書館／資料館などを訪れた。



写真1 ナミビア大学（UNAM）の一角

ナミビア大学では、本プロジェクトの共同研究者であるナミビア大学社会学部の Romie Nghitivelekwana 氏と本研究プロジェクトや今後の教育研究協力についての打合せを行っ





写真3 講演会前の様子。後ろ姿は、高田教授、大学院生の河尻さん、山本さん

ナミビア国立図書館／資料館では、一般蔵書のほかにアーカイブ資料としてのナミビア独立前後の新聞各紙や出版物を収めた地下の書蔵庫にも担当者から案内をしてもらった。他方で、サンをはじめ人類学をはじめとした学術系の文献を揃えたナミビア科学協会の蔵書では、気になる蔵書が多数見られ、時間が許せばじっくり訪問したいと思うものであった。

報告者のウィントフック滞在の終盤には、在留邦人であるエイブラハムス島袋律子氏の夫である Kenny Abraham さんが経営する私立 Jakob Marengo 中等学校を訪れた。授業の取り組みの一環として、性教育における月経理解の実践で、男女を問わず全校生徒が「手作りの再利用可能な生理用ナプキン」をみずから制作するという試みがあり、その詳細について担当教員や生徒を交えて紹介してもらった。月経はサニテーションや衛生、人権に関わる問題として国際的に取り扱われるテーマであるが、このような先導的とも思える教育方針と、それらを受け入れている生徒の皆さんの姿勢に強い感銘を受けた。



写真4 再利用可能な生理用ナプキンの制作工程を示した展示

以上のようにナミビア滞在中は、ボツワナ渡航時同様、各所において高田教授と同行したこともあり、高田教授の人脈や経験を共有させて頂いたことは幸運であった。ただし今回も報告者のナミビア滞在期間が短かったことで、狩猟採集民や農牧民といった本プロジェクトの対象者が暮らす地域に足を伸ばすことができなかつたのは残念である。それでも、報告者が長年関わってきたカメルーンとの風土的・文化的・歴史的な違いを一端とはいえ触れることができ、その上でプロジェクトの軸となる教育や制度といった面から国ごとの特徴を垣間見ることができたのは大きな収穫であった。